

平成27年度 第5回 総合教育会議

- 1 日 時：平成27年8月30日（日） 8:45～9:45
- 2 場 所：県庁 講堂棟3階 131・132会議室
- 3 出席者：三重県知事、三重県教育委員会（5名）

事務局＜戦略企画部＞

部長、副部長、ひとづくり政策総括監、戦略企画総務課長
＜教育委員会事務局＞

副教育長、次長(教職員担当)兼総括市町教育支援・人事監、
次長(学校教育担当)、次長(育成支援・社会教育担当)、
次長(研修担当)、教育総務課長、教育政策課長、
学力向上推進プロジェクトチーム担当課長

ほか

4 質 疑

◆戦略企画部長

ただ今から、第5回の総合教育会議を開催させていただきます。
開催にあたりまして、知事からご挨拶をお願いいたします。

●鈴木知事

おはようございます。今日は休日の早朝からお集まりいただきましてありがとうございます。

どうしても8月中に総合教育会議を開催させていただきたいという思いがありましたので、休日早朝で大変申し訳ありませんでしたが、お集まりをいただき開催させていただきました。

今回の議題は、8月25日に公表になりました全国学力・学習状況調査の結果の内容と今後の対応方向です。結果については、この後、説明があると思いますが、全体としては、依然として全教科の平均正答率が全国平均を下回るということで厳しい結果ですので、私たちとしても真摯に受け止めて、これからさらに取組を加速していかなければならないと思っております。

一方で、よく中身を見てみますと、ほぼすべての教科で全国平均との差が縮まっている、あるいは、4教科は調査開始以来、最も全国平均との差が縮まっています。前回からの変動ということであれば、小中学校トータルで見た場合においては、全国トップクラスの伸びを示しているものもあります。

また、学力調査の成果のみならず、学習状況の調査などにおいても、学校の組織的取組、授業のめあてやねらいを示す、あるいは、校長の見回り、無解答率を減らす、家庭での計画的な学習を進める、そういうことなどにおいても改善が見られたものも多くあります。全体としてはまだ道半ばですが、保護者の皆さん、学校現場の皆さん、そして子どもたち、行政の私たちもやればできるという改善の兆し、手応えをかみしめることができる部分もあったと思っております。

9月に詳しい分析結果も踏まえ議論させていただきたいと思っておりますが、今日は

この結果の概要を皆様と共有させていただいて、とにかく大きな方向性としては、こういうことに留意して取り組んでいかなければならないのではないかと、あるいは、結果をご覧いただいた委員の皆様のご感想や思いをお聞きして、一緒に改めてのスタートを切っていきたいと思っています。いずれにしても、子どもたちのために私たちができることをやり尽くすことが大事だと思っていますので、何卒よろしくお願ひしたいと思っています。

◆戦略企画部長

それでは、議事に入らせていただきます。

知事から話がありましたように、本日の議題は「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果概要と今後の対応方向について」でございます。

まず、事務局から資料の説明をさせていただきます。

◆教育委員会事務局次長(学校教育担当)

今回は、資料1～3及び参考資料を基に、概況を報告させていただきます。

資料1をご覧ください。1枚目が平均正答率、2枚目が平均無解答率に係る経年変化についてです。3点に絞ってご覧いただければと思います。1点目は、昨年との変化について、矢印をご覧ください。今回、理科もあって10教科ですが、赤は実質的によいという意味で色付けをしております。10教科中9教科において、全国平均との差が改善したことを意味しております。

2点目は、全国平均との比較です。青色の網かけは、全国平均を上回っていることを示しております。過去をご覧いただくと、調査開始当時には、中学校数学で全国平均より高かったこともありましたが、残念ながら今回の27年度に青は付いておりません。ただし、小学校国語Bと中学校数学Aでは全国平均との差が0.1ポイントという水準にまで迫りました。

3点目は、ピンクの網かけです。東日本大震災で23年度は調査を実施しておりませんが、過去8回のうち、各教科での最良の結果をピンクの網かけで示しており、小学校5教科中4教科で過去最良の結果となりました。

同様の視点で2枚目をご覧ください。無解答率ですので低いほうが良いということにして、矢印を見ると10教科全てで下がっており、赤で改善していることを意味しております。2点目は全国平均との比較について、今度は青色のところにして、10教科中6教科で改善しております。

3点目として、過去最良のところにピンクの網かけをしております。正答率同様、中学では調査開始当初に最良だった科目もございます。今回は、小学校の全教科を含む10分の6教科でピンクの網かけが付いており、過去最良だったことを示しています。

次に、資料2をご覧ください。公表1週間前の時点で、市町に今後の公表意向について調査したものです。2年前は9市町でしか公表していなかったのですが、昨年に続き、今年も何らかの形で全市町が公表予定です。

県といたしましては、特に数値を用いた客観的な方法での公表や、県民運動で家庭・地域の協力を仰ぐためにも、学校現場の努力や課題も共有していただき

いといった趣旨で、学校質問紙の公表を推進してきたところです。その結果、客観的な数値によって公表する市町が9市町から12市町に増加予定となっております。児童生徒質問紙については、昨年同様、何も公表しない市町はない予定です。学校質問紙については、昨年度は13の市町で何の公表もしなかったところですが、現在、全市町において前向きに検討中という状況です。

続いて、資料3をご覧ください。児童生徒及び学校への質問紙について、テーマ別にいくつか傾向を調べたものです。なお、文章で若干分かりづらい部分については、参考資料の方をご覧くださいだけだと思います。

まず、26年から27年の経年変化と、県民運動を始める前の直近で悉皆調査を行った21年との比較、この短期と中期の比較を両方見られるようにしております。また、相対と絶対の両方の視点からの評価を総合的に見るように、全国との差が縮まっていれば赤で「A」と表記するとともに、自己成長という観点も大事ですので、三重県の数値の絶対値が伸びた場合は「+」と表記しております。

なお、参考資料の後半については、全国と三重県の差がプラスマイナス5ポイント以上のものを列記するとともに、参考のため、秋田県等の他県のデータを並記しております。

資料3にお戻りください。まず1点目、組織的な取組が大変進んだということで、参考資料の3ページを見ていただくと、赤が大変多いことにお気づきいただけるかと思います。授業における「めあての提示と振り返り」、そして校長の見回りです。「めあての提示・振り返り」については、小学校と中学校における、めあてと振り返りの状況を学校と子どもの両方に質問しており、8つの組み合わせがあります。全国的にも三重県においても、中学校での振り返り、子どもの受け止めがそれぞれ悪い傾向にあります。また、参考資料の括弧のところをご覧くださいますと、8個のうち7個がA⁺以上で、1つだけC⁻となっており、それは3ページ目の下から2つ目の中学校でのめあての提示に係る先生側の意識です。

資料3の1枚目から2枚目にかけてですが、先生側がやっているという意識と、子ども側のやってもらっているという受け止めの乖離については、全国的にも20～30ポイント程度のかかなり大きな差があることはよく指摘されております。秋田県ですら、その半分程度の開きがあります。三重県は大体全国平均並みですが、2点特徴的な動きがありました。1点目は、1ページの下の辺りに記載していることでして、めあての提示について、中学校だけは減ってしまっていることは問題ですが、一方で子ども側の受け止めについては参考資料2ページの18にあるとおり、10ポイント以上伸びております。結果的にはギャップ自体は相当縮まり、全国平均よりも良好となっております。

2点目の特徴は、資料3の2ページに記載してあることでして、小学校の振り返りについては、先生、児童ともに大変伸びております。ただ、先生の意識の伸びが10ポイント以上と相当伸びており、結果的に乖離が拡大しています。

2ページ目の校長の見回りについては、週2回以上見回っているという学校が小中ともに10ポイント以上改善があり、参考資料の3ページ目の④でⒶ[®]という

一番良好なカテゴリーになっており、小学校では全国平均を上回るに至っております。

続いて、3ページ以降の家庭での過ごし方、生活習慣・学習習慣についてです。改善が見られた主な点は、平日のテレビ視聴、計画的な勉強、宿題、予習・復習は、比較的改善状況がよく、特に中学校での改善状況がいいという状況にあります。

次に、4ページ目、課題が残されている生活習慣としては、いわゆる「早寝・早起き・朝ごはん」の類ですとか、5ページ目の学習時間そのものは平日であれ休みであれ一進一退の中、全国では伸びている状況にあり、結果的に全国との差が拡大しています。

なお、スマートフォンの類は、直近は多少数字が改善しているとはいえ、中期的に見ると最も悪化しているC^oです。

続いて、6ページの読書習慣についてです。学校図書館の授業における計画的な利用については改善している一方で、昼休みや放課後、休業中などにおける地域の図書館なども含めた自主的な活用については、残念ながら小中ともに減っております。さらに、参考資料の2ページの⑧にあるように、短期、中期ともC⁻と課題を残している状況です。

続いて、資料3の7ページ、家庭・地域とのかかわりについては、三重県の一つの美点であり、従前から、子どもが地域行事へ参加する、あるいは家の人が学校行事へ参加するという割合が高く、今回もその傾向が続いております。

一方で、つぶさに見てまいりますと、保護者の学校への参加状況については、中学校では全国平均を下回っており、一つ課題を残しています。

続いて、8ページ、自尊感情についてです。中学生では着実に増加しており、なおかつ全国平均を上回っている状況がありますが、小学生では残念ながら若干かんばしくない状況にあります。また、チャレンジするような関係の指標については、着実に増加傾向にあります。全国ではもっと伸びている状況にあります。なお、自尊感情については、学力の向上自体が自尊感情の向上にも大いに寄与するという指摘もございますので、そういった側面にも期待したいとも考えております。

以上でございます。

◆戦略企画部長

それでは、意見交換に入りたいと思います。本日は、1時間弱の限られた時間なので、資料1が平均正答率、資料2が調査結果の公表、資料3が質問紙の調査結果ですが、特にこれについてということではなく、全体を通してご発言をいただければと思います。どなたからでも結構ですが、いかがでしょうか。

○前田教育委員長

簡潔に申し上げたいと思います。まず、知事もご挨拶でおっしゃったように、日曜日のこの時間帯にこの場にいられる自分の幸せといたしますか、これは嫌みでも何でもなくて、本当にこういう職をさせていただいていることに、責任と喜び

を感じます。

もう一つ、今回、全国学力・学習状況調査の結果が8月25日に発表されて、先ほど事務局からの説明がありました。今日が30日ですが、従来とものごく大きな違いを私は感じています。というのは、この説明資料の作成までがすごく早かった。それから、いわゆる私、レイマンですが、私のような者にでもよくわかる、十、Aとか、赤で書いてあるとか、非常に親切、丁寧な説明資料をこの短期間でつくられたということで、冒頭、知事のご挨拶にありましたが、ここに熱意が表れているのではなかろうかと、私は評価しております。

私自身は、教育委員会定例会でこの第一報を説明いただいたときに、心の中でOKだと思いました。どこから見るかということでしょうが、やはり前回と比べてどうかという点です。いろいろな施策を打った、いろいろな努力をした、その効果があったのかどうか。現場でやっておられる方たちが、自信を持てたかどうかという観点から見て、私は効果があったと思います。

ただし、客観的には全国平均との比較という意見もあるので、諸手を挙げて喜ぶというところまでには至らないだろうけれども、これは当初から時間がかかると思っていました。分母が非常に大きく、学校を通じて三重県の隅々までの子どもを対象に取り組むわけですから、施策を打って一週間、一月、半年で即効的に効果が出るものではないだろう、まず思いがあって、次に施策があって、その効果が出てくるのは、時間がかかるであろうと当初から思っていました。ですので、今回、全国平均に至らなかったことについては、私はそんなに気にしないでいいだろうと思います。やったことに対する自信、評価をしてもいいのではなかろうかと思っています。

今回は民間の企業へ分析もお願いするというふうにも伺っています。その分析結果と提言が出てくると聞いていますが、事務局も独自の意見を持っている必要があると思います。当局者の意見と客観的な意見のすりあわせを真剣にやっていく必要があると思います。

最後に、もう1点だけ。今回加わった理科の結果を見ますと、やはり国語や算数の上位県は上位です。ここは反省し、技術的に見直す必要があると思います。例えば、今までの教科だけでしたら、上位県が今までやってきたことは間違いのない、これをもう少し磨いていったほうがいい、といわゆる攻めと守りを学ぶことでよかった。しかし、理科は従来の教科と似たような結果が出た。これは現場で子どもたちにどう学ばせているかということが、この結果に表れてきたのではなかろうかと思っています。理科の場合は傾向や対策もないわけですから、教えるという基本的な部分の結果が表れてきているとすると、三重県は教え方も学ぶ必要があるのではなかろうかと感じました。各市町との教育委員会との関係もありますので、この状況を私たちの立場で発信していきたいと思っています。

○森脇教育委員

私は、26日の朝刊の見出しをすごく期待していたのですが、4年連続平均を下回るというのが前に出てしまって、新聞報道としては少し残念だと思いました。

私の捉え方は、前田委員長と同じですが、言い古された言葉で言うと、「山が動いた」というふうに言ってもいいくらいの話だと思いました。これはやや政治的な表現なので、離陸という言葉もいいかなと思っています。

いろいろな指標を見せていただいたのですが、何が変わったかというところ、学校が動いたと思います。これまでは学校が学力調査に対して真剣に対峙していなかったと思います。でも、段々と変わってきていて、校長の見回りのパーセントが段々と上がってきていて、今回は全国平均を上回りました。学校が段々と真剣に問題に対峙するようになって、その結果が、今回はいろんなところに大きく表れています。例えば、無解答率の減少もそうですが、子どもたちが最後まで頑張ったという指標も大きく伸びています。これは子どもたちの問題というよりは、学校がしっかり最後までやり抜けというような姿勢で取り組んだからだと思います。そういう意味で、学校、それから教師も変わりつつある。発展的な学習をやったという率が今回すごく伸びているので、ぜひリフレクションしてほしいと思います。

ただ、課題を言えば、まだ子どもたちまでいっていない。それは学習時間の量がまだ十分伸びてないところに表れている。学校だけではなくて、保護者等の学校がコントロールできない部分もあります。保護者の姿勢とか、あるいは地域の教育に対する関心とか、いろいろな問題を含んでいるので、ここまで浸透していくと、多分安定的に学力が高い状態を保てるのではないかと思います。課題はあるものの、今回は大きく前進したと捉えています。

その他、家庭学習の問題がありますが、もう一つ、地域間格差、それから学校間格差のところを目を向けて、ぜひ分析をしていただきたいと思います。その際は、地域で県民力を結集してという言葉が教育ビジョンにありましたので、そういうことを実質的に具体策として提示するにはどうしたらいいかということ、県教委も考えていく必要があるのではないかと思います。

○柏木教育委員

私は、8月6日に三重県で行われた小中学校長の研修会の学力向上という分科会に出席させていただきました。120名を超える校長先生方が、校長のリーダーシップはどうかとか、地域へのかかわり方はどうしたらいいのかということ、KJ法を使って、本当に熱く語っていました。それを見て、私たちの学力向上に向けた思いが校長先生までしっかり届いたと痛感しました。人が動かなければ学校も動かない。その中でも校長先生のリーダーシップというのがすごく熱く感じられて、来年が期待できそうな雰囲気をつかみました。

それで、今回、この結果を受けて、やはり家庭としての責任・責務が果たされてないと痛感しました。家庭といってもいろいろな家庭があるので、もう少し学校のほうからも家庭への働きかけ方について、予習・復習がされていないというだけではなくて、具体的に、予習とはこういうことをしたらいいんだよ、復習とはこういうことをしたらいいんだよということを、保護者へ伝えて、学校と保護者が連携しながら子どもたちを育てていくことが必要ではないかと感じました。

分析に関してですが、やはり伸びた学校の分析はとても大事だと思いますし、また、県教委が力を入れた実践推進校の分析もしていただければと思います。

それから、各学校がどう変わってきたのか、それぞれ自校の経年分析をしていただいて、それを発展させていければと思います。

○岩崎教育委員

今回の学力・学習状況調査のトータルな結果については、それぞれ各委員がおっしゃるように、伸びしろがあった分、その伸びしろをきっちりと確保してくれたという言い方でいいのではないかと思います。その意味では本当に安心しました。やるべきことをやるときっちりと伸びるなとつくづく思ったのですが、ただ、だからこそ課題も見えてきました。皆様の発言の中にもありましたが、今後のキーワードは主体的に取り組むとか、自主的に取り組むとか、主体的、自主的がキーワードになるだろうと思います。家庭学習の問題もあります。児童生徒側の主体的、自主的ということもさることながら、柏木委員の発言を受けて言えば、それぞれ自校の主体的、自主的な取組が大切で、やらされている、あるいはやらなければいけないと言われているからやるのではなくて、自主的、主体的にやっていくという学校側の取組の仕組みを県として支援していくのがすごく必要だと思います。

何回も続けて申し上げておりますが、今回、家庭の課題も見えてきているわけですから、一つはコミュニティ・スクールの話に的を絞った分析はしておく必要があるのではないかと。この前の、県教育委員会特別顧問の貝ノ瀬さんのお話だと、6次8次の教育再生実行会議の提言を受ける形で、今後、全国で3,000校ぐらいのコミュニティ・スクールを指定していき、5、6年後ぐらいには義務化をしていこうということでした。地域行事に参加している子どもが多く、そのことが自尊感情につながっているというのは三重県の特色です。それをうまく活かしていけるよう、今回の結果をベースに、コミュニティ・スクールの取組がどういう成果をあげているのか、あるいはどういう課題があるのかということをはっきりとさせていく必要があると思っています。

地域の抱えている課題は様々ですし、地域によっては、外国から来た子どもたちが多い地域もあります。そういう地域ではどういうふうになっているのか、どういうふうにするべきなのかということは、学校側の自主的、主体的な取組が求められるべきだろうし、そのときにもう一つ課題になると思っているのは、中学校のコミュニティ・スクールの課題です。

この前、柏木委員と一緒に小中学校の校長先生の研修会に出させていただいたとき、私はコミュニティ・スクールの分科会に出ました。そこでグループワークに参加させていただき、津市の南が丘中学校の校長先生のお話をお伺いすることができました。南が丘小学校はコミュニティ・スクールを一生懸命やっていますので、今度は中学校でも取組もうとしているのですが、専門教科の先生が多い中学校と小学校での人のやり取りは少し課題が出てきていますという話を率直にされていました。コミュニティ・スクールの仕組みは、校長や教頭といった学校

側が丸抱えでつくってしまっただけで、地域の側でつくらなければいけないと言っているのですが、それがなかなかうまくいってないのが、三重県内の一つの課題だと思っています。仕組みを地域の側でつくっていくようにしていくためには、もっと学校が開かれていないといけないし、せめて情報だけは全部公表されていなくてはいけません。地域の保護者あるいは地域の皆さんに、学力調査の結果を含めて学校の現状を知らせるということに対して、いまだに若干躊躇が見られるのは、まだ第一歩を踏み出せていない地域もあるのだと考えます。例えば、無解答率をより減らすためには、読書活動の推進は非常に大きいと思うのですが、地域や学校の図書館を使っている率は非常に少ないわけです。そこで学校図書館を開放して、いろいろと本を読みましようという取組をするのは、学校の先生でなくてもいい。司書の資格を持っている地域の方の助力が得られるような開かれた学校図書館であってもいいだろう。このように、課題を地域で共有して、地域の特性を活かして学校を支える仕組みを全県的につくっていく必要があるだろうと考えます。

幼・保・小・中と義務教育段階に至るまでの間、誰かが見ているという形で自尊感情を伸ばす教育が展開できれば、将来、東京や大阪に出ても、自分の子どもは三重県で育てようと思って戻ってくる可能性が高まる気がしていて、息の長い話になりますが、それが地方創生につながっていくと思っています。

前田委員長が冒頭におっしゃったとおり、日曜日の朝、ここでこういう話をするのはすごく意義のあることであるのは確かです。ただ、我々はいいいですが、例えば、取材に来ている若い方々のワーク・ライフ・バランスを考えると、今日、朝一番で子どもを誘って図書館に行こうよと言ってもらうことが、私は一番大きいことではないかと思っていました。

◆戦略企画部長

委員の皆様からいろいろな観点からご意見をいただきました。それでは、ここで教育長からも発言をお願いします。

○山口教育長

私自身、教育行政の事務局を預かっている中で、教育委員の皆様方に叱咤激励されながら、ここまでやってきました。事務局から提出しました参考資料の4ページ、5ページのあたりの学校教育の課題については、口を酸っぱくして言ってきたので、めあての提示や振り返りとか、校長の見回りはよくなりました。

ただ、学校質問紙の8、9、10の習熟の遅いグループに対する少人数の指導を行えるようにしましたかという質問は、全国との差がマイナス17とか15とか11となっていて、全国ともものすごく乖離しています。中学校でも学校質問紙10番、11番の習熟度がマイナス12.2とか、11.1と低い状況です。我々は非常勤講師や定数とかで少人数教育に対する加配をしてきました。しかし、それがうまく使われていないのではないかと思いますので、めあての提示、振り返り、校長の見回りと同じように、現場にもう一踏ん張りしてほしいということをお願いしたいと思います。

家庭について、学習塾で勉強していますかという質問があり、秋田県は30ポイントですが、三重県は67.6ということで、倍以上です。これは家庭での学習時間とリンクしていると思いますが、保護者は学習塾へやっておいたら、家庭での学習は面倒を見ないという状態になっているのではないかと。秋田や福井は三世代家族が多いと言いますが、祖父母が宿題を見てやる、したかどうかを確認してあげる。中身はわからなくてもやっているということで、岩崎委員が言われたように質問紙のこういう結果を公表すべきだと思っております。家庭の学習時間は、秋田や福井と比べて三重県はこんなに少ないのですよ、あるいは学習塾へ通っている割合がこんなに高いのに成績は低いということを言っていないといけないと思います。だから、公表する意義があり、情報共有する意味があると思いますので、公表については保護者や地域の人にしっかりとオープンにし、ホームページにも載せていくことが、子どもたちのために一緒に汗を流してもらえることにつながっていくのではないかと考えております。

もう一つ、参考資料4ページ、5ページの、授業でのノートの取り扱いについてです。特に5ページの参考資料の3番、4番、5番に、「授業で扱うノートに学習の目標やめあてをまとめて書くように指導しましたか」とあります。福井県や秋田県、そして三重県でも明星小学校ではノートのとり方をきちんと指導しております。まだここまでに至っていないのが実態ですので、この点は引き続きしっかりと取り組んでまいりたいと考えております。もう一步、もう一段階上がるためには、他者から学ぶということと情報を共有することが大事かと思っておりますので、引き続き頑張ったいと思います。

◆戦略企画部長

それでは、知事、よろしいですか。

●鈴木知事

ありがとうございました。委員の皆様から大変ありがたいご意見をたくさんいただきました。とはいえ、今、教育長が言いましたが、手を緩めることなく、これからもやれることをしっかりやっていきたいと思っております。

今回、自分なりに思うのは、県の教育委員会のメンバーが市町の教育委員会の皆様と一緒に学校訪問を徹底してやったという密なコミュニケーションが、先ほど森脇委員がおっしゃっていただいた、「学校が動いた」ということにつながったのではないかと考えております。みんな人間なので、面倒くさいとか、乗り気がしないと思っても、何度も何度も来て、やりましょう、やりましょうと言われたら、頑張らなければいけないなと思えると思っております。そういう密なコミュニケーションはすごく大事なことで、私は行政のリソース配分をする者として、これから、学力の面において市町教育委員会や学校と密にコミュニケーションが取れるような態勢を整備していかなければならないと考えています。

それから、包括的に言えば、選択と集中を図って、これとこれとこれはやる、具体的にこうするというを示したことがよかったのではないかと考えています。もう一つは、先ほど柏木委員にもおっしゃっていただきましたが、火がつい

てくれた校長先生が多かったのではないかということが、今回よかったことと思っています。

そして、森脇委員がおっしゃっていただいたように、26日の報道の全部がそのような形だったことは、私も残念な部分がありました。あれは2つの要素があって、一つは私が政治的に政策集に書いていることもあり、メディア的にもそう書かざるを得なかったということで、もう一つは、今回の会議資料のようなわかりやすいファクトとなるものが提示されておらず、メディアに変動率とかを見るエビデンスがなかったことも要因の一つだったと思います。そういうこともあって、今回なるべくすぐに開催して、実態をよく知ってほしいという思いがあったので、若い記者の皆さんのワーク・ライフ・バランスを妨げていますが、今日やらせてもらいました。

一方で、先ほどもありましたようないくつかの課題があります。例えば、この資料3の3ページで家庭での過ごし方のうち、改善されたこととして、宿題をやるとか授業の予習復習をやるとか、自分で計画を立てて勉強をするというふうに言っているにもかかわらず、5ページでは学習時間が改善されていないということです。これは例えば、宿題は出しているが、宿題の中身が緩いのではないかとか、家庭での学力向上につながるような宿題の出し方ができていないのではないかとということが考えられます。例えば、ワークシートとかやっているにしても、その中身が授業や学校のテストでやっていることや、学校で確認をしていることなどと連動をした形になっていない、子どもたちの学力向上の成果を生むような宿題の出し方になっていないのではないかと。私たちも3点セットという形でワークシートという宿題の部分を重要視しているからこそ、その中身の改善とか分析をしていく必要があると思います。

それから、家庭での役割についても、ある教育経済学の本などによれば、例えば、男の子は、お父さんと一緒に宿題をやったかやらなかったという結果ではなくて、お母さんではなくお父さんが横にいて一緒にやってもらうとか寄り添ってもらうというプロセスが学力向上につながるということが書いてあります。一人親家庭とかもあるので、配慮はしなければならないものの、家庭においても、父母の役割分担とか、こういうやり方がありますよねという形で具体的に示していくことは大事ではないかと思いました。

加えて、これから分析する部分と、表に出しにくい部分もあるかもしれませんが、地域間や学校間の格差があってはなりませんので、その点に関する分析は重要なことだと思っています。

それから、前田委員長と教育長が言った習熟度のことと関連しますが、三重県スタイルというか根本的な学校での授業のあり方がはっきりしていないと前田委員長に言っていただきました。山口教育長が習熟度のことで言いましたが、他県を見習ってしっかりやっていくことに加えて、学力や子どもたちの学習意欲を安定的持続可能に高めるような根本的なスタイルを確立していくことも、同時並行で中長期的に見ながらやっていかなければならないと改めて思ったところであります。

いずれにしても、これから分析をしっかりとしたうえで、ご提示し、ご意見を伺いながらやっていきたいと思えます。あと、どういう方法があるのかわかりませんが、私でも教育長でも教育委員長でもいいのですが、頑張った学校や先生たちを褒めてあげるような仕組みをつくって、より頑張ろうと思えるような方策を幅広く考えて、来年度の予算を考えていく必要があると思っています。頑張ったらやればできると思ってもらった次は、もっとやればできると思ってもらう仕組みも大事だと思いますし、子どもたちも自分たちの校長先生や自分たちを教えてくれている先生が頑張った結果が出て、教育長や知事とか教育委員長から褒められたらうれしいと思うので、そういうことを考えていきたいと思えます。

◆戦略企画部長

残り10分少々あります。もう一度委員長お願いします。

○前田教育委員長

知事が最後に言われた評価する、褒めるという件について、私ももう一度発言をする機会があったら提案させていただこうと思っていました。私は事務当局者、教育長、あるいはそれ以外の方とは少し違う立場で、ある意味、個人の意見が言える立場だと理解しています。私の意見は、冒頭に申し上げたようなことですので、私の立場でよければ、そういう場面をぜひともつくっていただけたらと思います。校長に頑張ったらできるということは申し上げませんが、やはりそれが第一目だと思います。あとは、精神論だけではいけないので、何をやったのかというようなところも、レイマンはレイマンなりの心で評価するというか、一緒に喜ばせていただく場面をつくっていただきたら、私の場合は日曜日でも土曜日でも出られますので、おっしゃっていただければ大丈夫です。上げ潮のときは、上げ潮の施策があると思えますので、万障繰り合わせて参加させていただきます。

◆戦略企画部長

ありがとうございます。ほかにどうでしょうか。

○森脇教育委員

私は昨日、ある市町に行ってお話をしていたら、学校側がいろいろ施策を立てて宿題を出しても、子どもたちの家庭学習の時間が伸びないと言っていました。全県的にもそうかなと思うんですね。これは、学校からは一番コントロールがしにくいところですが、一番肝心なところですね。国の調査では、親の経済的、社会的な背景が非常に困難な子どもたちと、そうでない子どもたちの学力格差は非常に大きいと言われています。それを乗り越える一つのキーワードが学習時間で、まず質よりも量ということで、学習時間が大きなポイントかと思いますが、学校が手を出しにくい状況にある。それはもしかしたら保護者、地域、あるいは、地域の教育関心とかいろんな行政的な手立てで補完するやり方が三重県は全国よりあまり進んでいないのかもしれないかもしれません。コミュニティ・スクールも一つのあり方だとも思いますが、地域の学校参加とか、外部講師の招へいとか、三重県は全国より進んでいないこともあります。また、中学校の先生が、自分の学校では9時

以降はスマートフォン、携帯を使うなど言っているが、子どもたちは、ラインでほかの学校の子とつながっていて、ほかのところはいいのに、自分の学校はどうしてだめなんですかと聞いてくることもあると言っていました。可能かどうかわかりませんが、教育委員会や行政のトップである知事の言葉として、9時以降はスマートフォンをやめて本を読もうというようなメッセージがあると、知事もこう言っているでしょうということを保護者や先生が言えるのではないかという気がするので、ぜひ検討していただければと思います。

○柏木教育委員

先ほど教育長からありました学習塾の件について、こんなにたくさん子どもたちが学習塾に通っている三重県の学力を考えると、学習塾へ行っている子どもたちは学力が高いのかどうかという分析もしてもらいたい。保護者としてはうちで勉強させるならただですが、お金を払って、学習塾にやっているのにもかかわらず低いのであれば、お金の使い処を間違っているのではないかと思います。一方で、保護者としては、学力が上がることを期待して塾へ通わせているので、結果が出ていないのであれば、学習塾も反省していただきたいと思います。

それから、保護者は具体的なことにしか反応できないので、予習しましょうと言われても、どうしたらいいかわからない。例えば国語だったら明日学習するところを読みましょうということを指導してくださいと保護者に具体的に連絡してもらって、宿題以外に予習もさせてみようかと保護者が思えるよう、保護者のモチベーションを上げることもしていただければと思います。

○岩崎教育委員

今の柏木委員の問題提起については、要するに家庭学習の外注の話なので、それで成果があるのかどうかという話は、一応確認をしておかないといけないことだろうと思いつながら聞いていました。

参考資料の4ページの理科について、前回は抽出調査だったので今回が初めての悉皆調査と言っていいわけですが、学校質問紙の6番目にある「前年度に理科の授業においてコンピューター等の情報通信技術を活用した授業を行いましたか」という質問は、三重県は全国平均よりも高いです。

けれど、理科を情報通信技術でやるというのは一つの手段にしか過ぎないのではないかと思っています。例えば、小学校では、自然観察をするとか、そういう実物教育を中心にしたほうが、理科に対する興味は湧くのではないかという気がしていて、これは詳細分析のときにはお聞きしたいと思います。例えば、四日市ではコンビナートの技術者だった人が、自分がやっていた仕事はこういうおもしろいことがあるんだよということを、地域の小中学校へ出かけて行って話していますが、そういう取組が理科の学力向上につながる手段ではないか、実物教育が重要と考えていく必要があるのではないかと思った次第です。

◆戦略企画部長

ありがとうございました。最後、知事お願いします。

●鈴木知事

ありがとうございました。短時間でありましたが、大変建設的な、ポイントを突いたご意見をいただきましたので、改善できることやお示しできるものは、次回9月に行う総合教育会議においてお示ししたいと思います。

後半のお話と前半のお話と絡めて何点か申し上げます。まず1点は、知事部局の子ども・家庭局で「みえ育児男子プロジェクト」をやっています。これは、父親も育児参画して子どもの生き抜く力を早々に育もうというような取組です。理科の自然体験などの学習意欲の向上や学力向上にもつながるようなことも、育児男子プロジェクトでやったらいいかもしれない。あと、家庭での学習でも、例えば、今回も国語Aはあまりよくなかったですが、国語Aは漢字テストとか言葉のテストみたいなものなので、クイズみたいにできるわけです。うちの3歳の息子でもそういうのをやりますので、育児男子プロジェクトとかでも生き抜く力を育む観点で、全庁をあげた取組になるようにしっかり取り組んでいきたいと思えます。

それから、もう一つは、先ほど私が申し上げて、委員長から賛同していただいた褒める仕組みについても、ぜひ考えたいと思えますので、みんながうれしい、次につながる褒め方を考えていきたいと思っています。

いずれにしても、まだ道半ばでありますので、手を緩めることなくしっかり取り組んでいきたいと思えますので、ご指導のほどをよろしくお願いします。

◆戦略企画部長

ありがとうございました。次回は9月に調整して開催させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は以上で終了させていただきます。

以上